

播磨の聖人「龜山 雲平先生」を発掘する……シリーズ 10回

第4回目

顕彰碑をたずねて、現地講座

龜山雲平顕彰会代表

講師：長野哲 先生

日時：12月15日（土）Pm 1:30～3:00

場所：白浜公民館 1F 会議室と松原八幡神社周辺

今回の講演は……

松原八幡神社周辺の龜山雲平先生にかかわる石碑や遺跡をめぐって現地解説をうけます。

- ◎ 松原八幡神社の境内にある、巨大な顕彰碑の碑文の解説をうけます。
- ◎ 白浜小学校校庭の「観海講堂跡」の石碑と「観海講堂」「久敬亭」跡地を歩きます。

お友達を誘いあわせて多数聴講してください。



[54]

白浜公民館だより [特集号]

播磨市立白浜公民館
電話番号350-17
046-4499



播磨聖人 龜山雲平翁

没後 百年祭記念

平成12年5月6日

播磨聖人・姫路藩校好古堂教授
 亀山雲平翁没百年
 記念講演会

平成12年5月6日(土) 13時30分開会
 会場 姫路市立灘市民センター

プログラム

		司会 偲徳会	福井朔郎
1	開会挨拶	倲徳会代表 河野通一	
2	来賓祝辞	姫路市長 堀川和洋	
3	漢詩吟詠	賀堂流絶範 魚住賀久	
4	講演	顕彰会代表 長野哲	
5	謝辞	倲徳会 亀山節夫	
6	閉会挨拶	倲徳会 松下貞雄	

主催 亀山雲平翁倲徳会
 後援 姫路市・姫路市教育委員会

吟詠漢詩

妻鹿山懷古

亀山雲平作

姫路支城妻鹿山

三郎曾此扼江閂

古松偃蹇餘豪氣

怪石狰獰留怒顏

漁艤千帆簇前海

嵯烟萬竈接遙湾

富強不復由仁義

姫路の支城妻鹿の山

三郎曾つて此の江閂を扼える

古松偃し遼りて豪氣を餘し

怪石狰獰として怒顔を留む

漁艤千帆前の浦に簇がり

嵯煙萬竈に接す

富強も復たに義に由らざれば

龜山雲平のプロフィール

龜山雲平の家系

曾祖父	龜山源五衛門成賢 めいぜん	禄高200石
祖父	龜山源五衛門成將 めいじょう	禄高180石
父	龜山源五衛門百之 ひゃくの	禄高160石
雲平	龜山源五衛門敬佐 けいさ	禄高170石
子	龜山丈助方正	

龜山雲平の生・没年月日

生 年 文政5年（1822）1月20日百之の次男として生まれる。
没 年 明治32年（1899）5月6日 競海講堂にて没す。行年78才。

龜山雲平の経歴と世相

天保3年（1832）…11才
姫路藩校好古堂に入学。角田心蔵先生に師事。
弘化3年（1846）12月6日…25才
姫路藩校好古堂助教授となる。
嘉永4年（1851）1月8日…30才
藩から選ばれ、江戸昌平坂学問所（通称昌平塾）に他藩の44名とともに入学。佐藤一斎先生に師事。
嘉永6年（1853）…32才
昌平塾卒業。同年6月3日ペルー艦隊浦和に来航。
10月25日藩主酒井忠顕となる。
嘉永6年（1853）12月1日…32才
藩主酒井忠顕の近習席学問相手に就任。
安政3年（1855）6月1日…35才
姫路藩校好古堂の教授に就任。

万延元年（1860）3月3日…39才

桜田門外の変（井伊直弼水戸藩士に暗殺）起こる。

文久元年（1861）11月5日…40才

姫路藩大目付となる。

文久2年（1862）…41才

坂下門外の変（老中安藤信正水戸藩士に襲われる）起こる。この頃より姫路藩にも勤王派が台頭してきた。5月26日藩主忠穂京都諸司代補佐に任せ、京都の警護を行なう。幕府は京都守護職を設け会津藩主松平容保を任命。姫路藩は任を解かれて姫路に帰った。雲平もこの任務に随従した。

元治元年（1864）12月26日…43才

姫路藩甲子の獄（勤王派処刑）。処刑の際に雲平裁決を公正にした。

慶応元年（1865）2月1日…44才

藩主酒井忠穂大老職に補せられる。

慶応3年（1867）2月30日…46才

藩主忠穂に代わり忠惇が藩主を継ぐ。忠惇29才。

明治元年（1868）1月3日…47才

鳥羽伏見の戦い起こり徳川軍大敗す。

姫路藩兵9日に帰藩。

雲平の長男龜山丈助方正も参戦し帰退す。

明治元年（1868）1月16日…47才

1月11日に、徳川方に味方した諸藩を打つ命令が新政府から出され、1月16日岡山池田藩1500名が、姫路城西方の景福寺山に陣を敷き姫路城を攻撃。この交渉係に齊藤豊介と龜山雲平があたる。翌17日、平穏裡に姫路城を明け渡した。

明治6年（1873）7月23日…52才

播磨國飾東郡松原村八幡神社の祠官を拝命す。

龜山雲平没百年記念講演会開催ご案内について

龜山雲平傳徳会 代表 河野通一

福井聰郎
田上茂雄

加藤進
松下貞雄

大西玉
角田豊

野に山に花が盛りとなりました。皆様やご家庭の方々もお元気でお過ごしのことと存じます。さて、播磨聖人と称えられました龜山雲平が没して百年を経ました。龜山雲平の遺徳を偲び記念講演会を開催いたします。ぜひ、皆様方のご参加をお願いいたしましたくご案内申し上げあげます。

記念講演会

演題

「播磨聖人 龜山雲平の業績」

講師

龜山雲平顕彰会

代表 長野 哲氏

日時

平成十二年五月六日

午後一時受付

午後一時三十分開会

場所

姫路市灘市民センター

(姫路市白浜町宇佐崎)

龜山雲平とは

龜山雲平は明治六年七月二十三日、松原八幡神社祠官として任命されました。姫路藩きつての立派な学者でありましたので、着任早々より雲平の高名と高徳を慕つて教えを乞う人が多く、書院を解放して「久敬舎」という塾を開校しました。

明治十年に、谷政則（広峰神社神官、谷政英の長男）が祠掌として着任され、神社の助手を得た雲平は「久敬舎」を本式な学舎にするため、明治十七年に新塾舎を建設し「國海講堂」と改名して遠近より入学した人々を教えました。

雲平は江戸幕府学問所「昌平舎」に学び、その学識は広く知られていましたが、なによりも德行をもつて人に接したため、後の世にまで播磨聖人と称えられました。

明治三十二年五月六日、雲平は「國海講堂」に没し郷葬により葬られました。以来、百年を経た今日、雲平の暮末における姫路藩での業績等を含めてこれを振り返り、灘地域全体の歴史として地域発展の糧としたいと思います。

大正三年、大勢の門弟によつて立派な顕彰碑（現、松原八幡神社東門そば）が建立され、白浜小学校体育館の横には「國海講堂跡地」の石碑が建っています。



節宇龜山先生顕彰碑建立記念写真（大正 3 年）

（前列左より白浜村役人役米薦次、西区長北村周太郎、東区長河野勝人郎、助役石田種、中区役場田代太郎
　前列左より官司龜山茂理、村長内海傳次郎、夏生校訓導岡田重成）

主意書

我節亭龜山先生ハ碩徳高儒ヲ以テ明治初年ヨリ意ヲ仕途ニ絶于城南白浜ノ里ニ萬シ専ラ松原八幡神社ニ奉祠シ傍ラ後進ヲ誘掖スルヲ以テ己ガ任トシ爾來殆ト三十年其薦化ヲ慕ム者甚多シ抑モ國ヲ治ムルノ務ハ人々ヲシテ徳ヲ修メシムルヨリ先ナルハナシ而シテ徳ヲ修ムルハ良師ノ得ルニアラザレハ能ハズ而シテ先生恭謹自持シ人ヲ教ユルニ徳行ヲ以テ先ト為シ循々懲マズ故ニ唯門人ノ敬事シ或ハ茲フテ以テ父ノ如クスルノミナラズ四方ノ士君子タル者亦先生ノ名ヲ聞キ先生ノ徳ヲ至ヒ既ニ儀容ニ接スルト否ヤトヲ問ハス皆尺素往来シ或ハ托スルニ詩文ノ評鑒ヲ以テシ尊ヲ以テ龜山先生ト為ス是レ豈古人ノ所謂天下ノ長者ニシテ而シテ又猶衆星ノ北辰ニ於ケルガ如キ者ニアラズヤ嗚呼先生ノ世ニ在ル既ニ比ノ如シ歿シテ而シテ人ノ追慕悲愴シ其遺風ニ感シテ興起スル者蓋シ妙少アラザルナリ不肖門人等ノ默々トシテ止ム可ケンヤ一別千秋先生ノ徳類再ヒ得テ望ム可カラザルモ其遺徳人ニ在り人ヲシテ親感興起セシムル者将二百世ヲ經テ絶エザラントス其徳豈碑シテ頤セラル可ケンヤ瑞松山嶺ハ先生遺体ノ威マル所已ニ墓石ノアルアリト雖モ白浜村頭松林一葉青翠演タラント歎スルノ所ハ先生三十餘年住居ノ地ニシテ魂魄ノ止マハ所又親海講堂遺跡ノ地ナリ誠二千歳ノ紀念タラズンバアラズ而シテ先生歿セラレテ已十有余年未ダ建碑ノ擧ナシ不肖等之ヲ慨スル已ニ久シ茲ニ諸君ノ賛助ヲ仰ギ表顕ノ碑ヲ建テ一ハ以テ先生ノ益ヲ慰メ一ハ以

テ世ノ風教ニ資セント欲ス之ヲ為ス其費ヲ要スルモ亦些少ナラズ希クハ門人故旧及有志ノ士散シテ四方ニ在ル者毎ツニ貢ヲ投シテ此華ア賛セラルレバ則其流汎ノ及フ所先生ノ徳光ト相並テ捐ニ千錢乃チザラント斯是不肖等ノ挽糸トシテ力ア儘クシテ奔走スル所ニシテ亦四方有志ノ士ノ争ツテ貨ヲ出シテ其速成ヲ棄ム所カ

前述ノ主意ノ下ニ不肖等主唱仕候間何卒多少ニヨラズ御賛成アランコトヲ切ニ希望仕候

大正三年 月

主唱者

白浜村長

全村校長

内海伝次郎

襟本近太郎

北河野勝太郎

福田久太郎

周太郎

田中久太郎

岡田重成

石川精

全村助役

白浜村役員

米沢菊次

会計

殿

本發所飾磨郡白浜村役場内



龜山雲平顕彰碑建立寄付者名

天已田	的大曾御	神木木東姫東東東	神今	赤尾神今妻妻	姫	大	神白	朝	
下土井	形塙根着	戸場場山路京京京	金戸市	穂道戸在鹿鹿	金	阪	金戸浜	鮮	金碑
原呂									
		拾	拾	家	二	三	拾	百	表
金大川中中	梶井竹竹丸小	神沖三五岡酒	圓岸伊	五西賀中平柳宮	拾金拾	小圓松伊	圓西	五	
川西口村村原内田田岡西澤中木十本井	篤甚木為米貞中柳文九長松吉晨嵐松伯	慎長	觀光市龟久佐	利道	長藤	鶴	崎	拾	
藏一七藏吉次正吉吉太之次四太力太爵	太次	瑞之二之太吉	信郎	次吉	太				
平郎	郎助郎郎郎	郎	助助郎						
飾東 大	神 姫八	妻	白	白 阿都	白	京	西上加		
磨京 阪	戸 路家	鹿	浜	浜 成倉	金浜	金	都宮郡西		
						五	七 八 三		
高門東藤加大石森勝綿吉瀬木河山永三諫沖内反永尾西西	濱中圓谷圓小圓荒岡西								
島脇家塚藤村田下部田田川庭野本田木山中海田田上崎崎	田島								
仁三悦丈鉄松好芳輝利源仁辰弥佐元佐徳盤芳彦早益辰龜	堅久	政	郡	木	崎	川見			
左衛德藏次藏太太太次七藏之之九一太一太根太太苗太三吉	一吉	次	長	武	右	房			
門 郎 郎郎郎 郎 助助郎郎郎郎 郎 郎 郎				矩	衛	新			

妻鹿 白一野市宗西御志魚下御
浜金横口場佐浜影方橋 中国
壱西 島野

花谷谷四一大兵常置林 加的大曾廣
田外内郷全阪庫全塩田 西形塩根村
壱

勝伊山田仙松浜網北松材圓 長松松高山岡土大長澤白小竹菅圓志橋村米三高宮森岡田中福
間藤路中石井野嶋村井木 谷岡尾田村本田森谷波井林内原 垣誥瀬沢木島崎本田中谷井
豊寅重忠市豊沖藤禎繁外 川佐捨兼繁三逸彦川祐觀弥琢勝 恵弁壯奥新三龟松卯門菊小
太吉蔵三次太一次次太松 廉 信三吉之郎太正静光之藏次 造次夫太太之太藏市藏太八
郎 郎 郎 郎 郎 郎 篤 助 郎 己 助 郎 郎 郎 郎 助 郎 郎 郎 郎

白一白一 白 飾 兼 北 一 白 木 加 白 東 嶋 赤 志 坂 志 粟 泉 久 大 加 加 坂 東 木
浜 金 浜 金 浜 磨 金 田 金 条 金 浜 金 場 西 浜 京 村 穂 方 越 方 津 川 畫 塩 西 東 元 山 場
武 壱 圓 五 壱 三 五 壱 圓 三 高 三 山 上 竹 船 岸 塩 入 根 清 炭 山 森 山 竹 深 橋 吉 中 今 木 乙
内 圆 秋 五 藤 内 宮 望 有 圆 波 圆 堀 圆 岡 圆 三 高 三 山 上 竹 船 岸 塩 入 根 清 炭 山 森 山 竹 深 橋 吉 中 今 木 乙
海 本 捨 本 海 内 月 本 来 川 崎 捨 木 田 木 科 月 田 江 来 瀬 本 本 本 本 中 津 誥 田 澤 津 庭 馬
松 彦 錢 德 芳 い 祐 勤 谷 申 柳 錢 市 栄 順 凌 安 采 軌 庄 庄 翔 憲 正 純 永 真 孫 貫 新 寅 瑞 嘉 木 順 利
之 太 松 蔵 く 泰 一 純 一 藏 郎 治 藏 雲 雪 策 山 之 兵 太 純 二 之 十 次 十 空 一 吉 太 次 吉 次 七
助 郎 郎 意 郎 助 衛 郎 助 郎 郎 郎 郎

白一阿下廣大八二東
濱金成中畑塩家金山
式 島 三

木糸妻 飾廣明奈東一白一裏白
場引鹿 磨嶋石良京金北濱
武 金 三 國 參拾錢
武

加一金一毫
古郡

浜中置竹梶新肥遊薪炭炭浜浜圓浜大瀬山三圓橋内大坂辰生志木河米野武圓
谷川塩内田田塚木先本本口中 田森尾本木 詰山西田巳尾田下野澤尻井
虎覺広芳松瀬清次辰万総与仲 庄英鉄治佐 廉權重庄卓 網熊哲 清男
之次吉次次太次三次二太三泰 之文治之郎 一次義兵朗僕藏吉爾裕一爵
助 郎 郎 郎 郎 郎 松 助 作 衛
門

福 本 太 右 衛 門

岡大黒圓
田村田
龜伊
之八
助郎

白一白一白一搢加的御 網赤北久安 東備 姫魚加八明四下
濱金濱金濱金保東形影 干穗在烟來 京前 路橋古重田郷中島
毫 壴 圓
引成場場

東神河石梶井圓森福 濱圓布井山高井藤寺伊松澁藤小近石高下小土八内福赤中清中民木吉
野沢野田原上 本十野 施岡田島上尾田奈田澤尾泉藤川井間谷田木海永藤嶋水島谷田
辰長弥 安定木 巖太錢卯 幾好日茂卯太香 一一 久 正利瀬長慎虎定宋松純悠与民彦文
三次衛次義太 正二 三 次乃彰一吉郎二脩郎郎榮一薰靜平平父三介郎吉二億義惣次恭
門 郎 郎 郎 助 次 郎

白濱

岡濱宮宮市常瀬津北内角澤石大沢八角山天前大 岩天浜福松鍛塙河
本本本本本村盤川田風山谷田原塚田杉谷田野川垣 崎野野井戸治住野
次助吉万清鶴常吉虎与栄政房梅丈雲藤糸定梅 曾増菊万伊龜貞右栄清
作太九次次太三之藏三藏 二太兵太吉郎吉義 太太次吉作松次次吉吉
郎郎 郎郎助 吉 郎衛郎 郎郎 郎

石	右之外氏名及金額刻別石	姫大路阪	神朝戸鮮	白濱生校	白濱東區長	白濱村長	白起人
工	○			栗生校首席訓導	白濱助役	白濱中區長	
一	○			白濱收入役	西區長	中區長	
建	○					長	
山	金小船伊西者	井西津勢崎氏	利道長藤鶴名	米岡石北福河樽内	澤田田村田野木海	真重周久勝近伝	義成精太太太次郎
菊	井西津勢崎氏	利道長藤鶴名	信郎吉吉太郎	米岡石北福河樽内	澤田田村田野木海	真重周久勝近伝	義成精太太太次郎
治	○						
	○						
	○						

山水之秀不出偉人則佳偉人蓋人與山水相得也故稱東山榮水明石川丈山任馬
不車王生鳥尚其事邑湖細波遙翠中江藤樹居焉德行化人稱曰近江聖人若播磨
即与先生亦其人歟先生諱善和字由之號節宇龜山氏姬踏藩世臣嘉永中遊昌平署
修治園學有文勅業成歸藩自侍讀陞太監察食祿百七十石時際幕末勤擾先生鞠躬
盡瘁輔翼藩政功不少既而明治維新絕志仕途為松原神社祠官僚開觀海講堂教授
後退遠近來學者甚衆先生天資孝友恭謹可敬而不可侮其後以德行率先人皆薰然
仰慕如白楊於山人此地乃歸唐郡白濱村白沙青松一帶掩映陽烟波望島嶼帆舶汽
船往來其間酒器皆以白濱珊瑚如繪畫先生業暇携帶冠童逍遙詠詠以樂居殆三十年
以七十八始病沒若其履歷及世系妻子瑞松山墓碑铭詳之今不復贅烏虧先生絕志
性遂高超出塵外德行以化人人稱聖人而其人與山水相得如此可謂近時丈山藤樹
二老者門人追慕不已嘗謂欲樹碑以不朽其遺蹟遠招余銘銘曰

名存遺櫛

夕守早耕

千古萬古

其人不死

大正三年十二月

從三位勳一等文學博士三島毅撰時齡八十五

梧窗鴻川亨西

節字龜山先生遺蹟之碑

帝室博物館總裁從仁位勲一等股野琢篆

山水の靈淑なる、偉人を出ださんば則ち偉人を住む。蓋し人と山水とは相得るなり。故に鵠東の山紫水明には石川丈山焉に住み、王侯に事へずして其の事に高尚す。琵琶湖の細波遙翠、中江藤樹焉に居し徳行人を化す。人称して近江聖人と曰ふ。播磨節字先生の若きは亦其の人なるか。

先生、諱は美和、字は由之、節字と号す。龜山氏は姫路藩の世臣なり。嘉永中昌平築に遊び洛閨の学を修するも必ずしも拘はれず。業成りて藩に帰り、侍講より大監察に陞る。食祿百七十石。時に幕末騒擾に際し、先生鞠躬尽瘁、藩政を輔翼して功少なからず。既にして明治維新。志を仕途に絶ち、松原神社の祠官と為り、傍ら觀海講堂を開き後進に教授す。遠近來たり学ぶ者甚だ衆し。先生、天資孝友恭謙なり。愛す可くして侮る可からず。其の教えは徳行を以て率先す。白砂青松一帯を掩映し烟波を隔てて島嶼を望み、帆船汽船其の間に往来す。漁唱響き沙鷗翔り宛ら絵画の如し。

先生、業暇には冠童を携帶し、逍遙詠詠して以て楽しむ。居ること殆ど三十年、七八齡を以て病没す。其の履歴及び世系妻子の若きは瑞松山の墓碑銘之を詳かにすれば今復た贅せす。

烏乎先生、志を仕途に絶ち其の事に高尚し、又徳行を以て人を化す。人、聖人と称す。而して其の人と山水と相得ること此の如し。近時の丈山藤樹と謂ふ可し。頃者門人追慕して已ます、胥謀りて碑を樹て、以て其の遺蹟を不朽にせんと欲し、遠く余の銘を招む。銘して曰く、

節は青松と堅く、心は白沙と潔し。自う徳を修むるに非すんば師を念ふこと切ならず。常に道模を奉じ夕べに遺規を守る。千古万古其の人死せず。

從三位勲二等文學博士 三島毅 撰す 時に齡八十五

大正三年十一月

梧窓 湯川亨 謹書

訓注

靈淑—神妙不可思議なこと。 相得る—持ちつ持たれつの関係。

鵠東—鵠川の東、山紫水明の地。高尚す—世俗を離れ高雅な暮らしをする。

琵琶湖—琵琶湖の湖面のさざ波遠くの翠の山波。化す—感化する。教化する。

世臣—代々の臣。譜代の家来。

洛閨の学—程朱の学。朱子学。

鞠躬尽粹—全力を尽くす。

輔翼す—輔佐する。助ける。

漁唱—漁をする歌声。

携帶冠童—若者や子供たちを伴ない。

逍遙詠詠—散歩しながら詩歌を詠み歌う。

贅せず—多くを言わない。

遺模遺規—遺されたまよりや教え、戒め。

植樹

九州大学名誉教授

岡田武彦

白浜町中村出身

0112 8

岡田 武彦

九州大学名誉教授、文学博士

姫路市出身

明四十一～

九州帝国大学卒

昭和二十四年九州大学助教授、三十三年同大
教授、四十一年米国コロンビア大学客員教授
となり、四十四年九州大学教養部長に就任。

四十七年西南学院大学教授、五十六年活水女子
大学教授を歴任。六十一年東方学会名譽会
員、六十二年日本中国学会名譽会員となる。

主な著書に『座禅と静座』『王陽明と明末の儒
学』『江戸期の儒学』『中國思想における理想と
現実』『孫子新解』などがある。昭和五十六年
勳三等旭日中綬章受章。



觀論錄卷之六

卷之三



歌 詞

我輩宿ニ思フ文運、慶長ニ始。國家ノ興替、係ル在シヲ惟ミル。我邦
恩ア國、建フト雖然、比偏武ノ以テ久シク國ヲ治ム。アヘキナ、堅不是、以テ
船中帝遣シ故ノ高城ノ書、取以テ我國固有ノ忠孝仁義ノ道ヲ培養ス。是於テ文道
大ヒ。我邦ニ行ナハシ明治中興蓋シ此。見テノ、陸海軍一團ニ、設勿レ大中小學校
ノ設ケ詳カ。且ツ具ムト謂フヘレ而、其諸區々亦必ズ演學ノ目ア。其他藝文學會ノ
設ケア、頑學鷹私塾ノ典ア。此レ因ニ、有志諸君ノ知レ所ナ、我々攝鷹舊燈路
宿舊鬼山師宇先生經學深遠而ノ旁ハフ詩文ニ長シ且フ爲行ノ長者ナムナ以、久シク
舊枝ニア、廢藩及ノア耽舊燈路城南海上白浪村ニ寓居レ其神社、奉事レ其住處亦
吟咏唱和シ以テ自ヲ樂ニ世味ニ於テ淡然トノ接ヌル所ナシ。舊生ノ門ニ至リ豈ナ乞フ
者、經詩ナ乞フ者、詩文ナ乞フ者、文雅其ノ乞フ所ニ從テ指授想々未タ曾ナ厄マズ
故ニ舊生ノ一々ビ其ノ門ニ入ス者ハ自テ覺ヘバ、至國體矣セクハ而ノ我輩モ亦深ク
先生ノ言行ニ感ズ然シ。先生ノ實居ハ神社、居シ舊生ノ宿學ニ便ナラズ因リテ思フ
文學ノ世運ニ因タル既ニ此ノ如シ況ノア先生ノ學丘也ア。實ノ衆人ノ望ノア斯ノ道
ノ泰斗トナス所ニノ百ノ徒學者ノ宿學スレ所ナカランヌルハ益一大道也ナラズヤ
我輩乃十倍力決闘シ君ニ地ナ白浪村ニトヨ。區退舍、新築シ先生ニ從フ者ナノ益
多ク文運ナ益マス盛ソナラシメント祇ス。馬手有志諸君可モ先生ナ國モノ相ヒ
共ニ力ナ盡シシ其ノ功ヲ助ケ成シテ以テ先生ノ學德ナノ無窮コ廣マクアノ且文運ノ
隆王政ノ盛ニ於テ其萬分ナ誇稱セバ益未曾有ノ一大偉業コアラズヤ我輩區々ノ志
ニ堪ヘズ聊ニ此ニ古音ナ陳ヘ有志諸君一賀ス諸君幸ニ此舉ヲ發成セフレラ幸甚

首 唱 者

万 脳 津

白 浪 村

金 利 信

坂 存

明治十七年二月

有志諸君
御 中

上
中
下
左
右



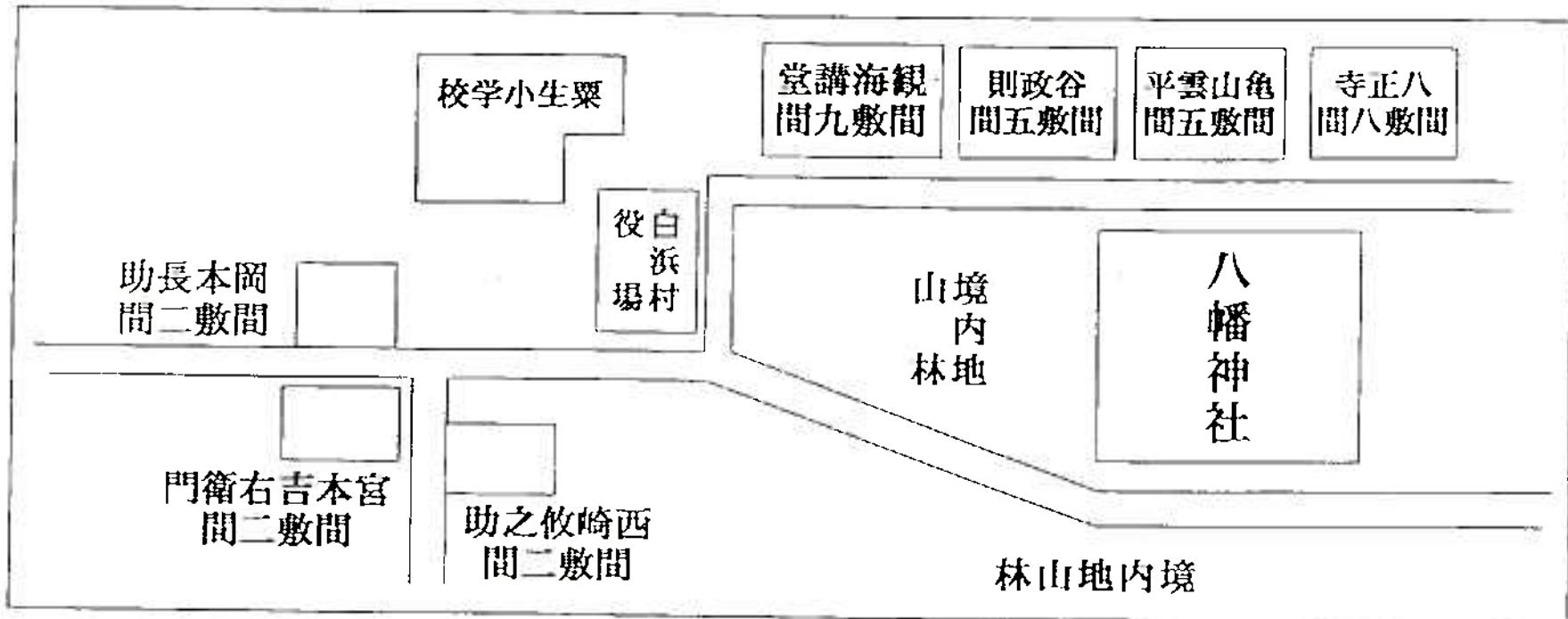
○他郷ノ人ニシテ姫路ニ寄寓シ自ラ詩人文人ト稱シ屢先生ヲ訪問シ酒ノ饗應ヲ受ケ傍若無人ニ出鱈目ノ詩ヲ作り得意顔ナル某アリテ多忙ナル先生ヲ困ラセルコト屢ナリシガ或日熟醉先生ヲ訪問シ例ノ出鱈目ノ詩ヲ作り高談數時遂ニ眠ヲ催シ不知不識其席ニ臥シ華胥ノ夢ニ入レリ時恰モ夏ノ夜ナリ暫クニシテ某目ヲ覺シ見レバ先生枕頭ニ端坐シ團扇ヲ手ニシテ蚊ヲ追ヘリサスガノ某モ之レニハ恐縮平身底頭禮ヲ述べテ逃ルガ如ク辭去レリ以後ハ決シテ酒氣ヲ帯ビテ先生ヲ訪フコトナカリシト云フ

○或軍人ガ酒ノ勢ニテ來ル度毎ニ泥靴ノマ、玄關ノ板ノ間ヘ昇リ膝手氣儘ノ氣焰ヲ吐イテ居タガ先生ハ常ニ玄關ノ板ノ間迄下リテ丁寧ニ之レヲ送迎シ其禮儀ノ正シキニ二度三度トナル中ニ其軍人モ不知不識ノ中ニ先生ノ德ニ化セラレテ遂ニ禮ヲ正フシテ訪問シ其致ヲ乞フニ至レリト云フ

○毎日觀海講堂デ生徒ヲ集メテ講義ガ有ル其都度當地ノ白痴ノ女ガ毎日講堂ノ庭ヘ遊ビニ來ルト生徒ガ其方へ向イテ時々妙ナ動作ヤ狂人態度ヲ呈スルト全ク講義ガオ留守デ有ルスルト先生自庭ニ降リテ丁度我子ナイタワル様ニ抱イテ門外ニ出サル暫クスルト又來ル又同様出サル再ニ及ンテ始終同ジ様ニセラレテ少シモ大聲ヲ發シテ追出サル様ナ事ガナカツタ

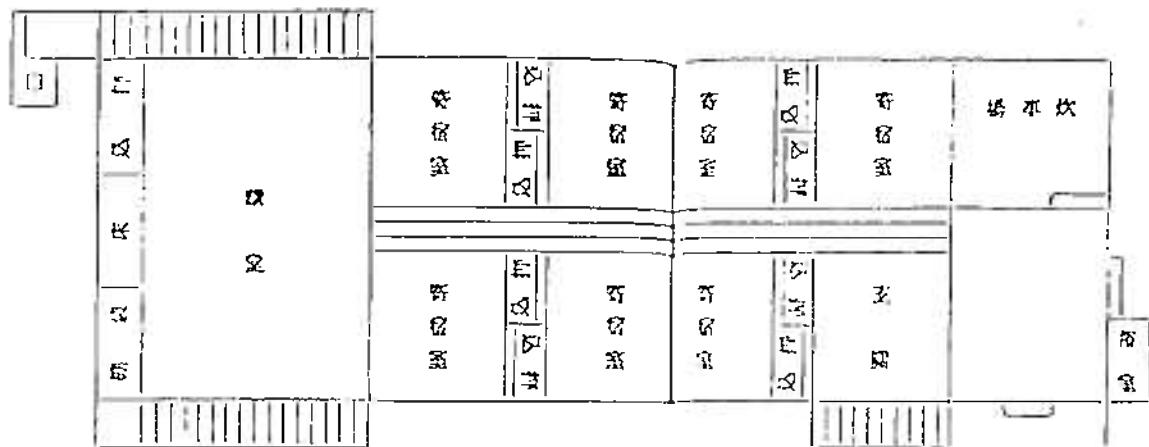
觀海講堂位置圖

(明治初年)

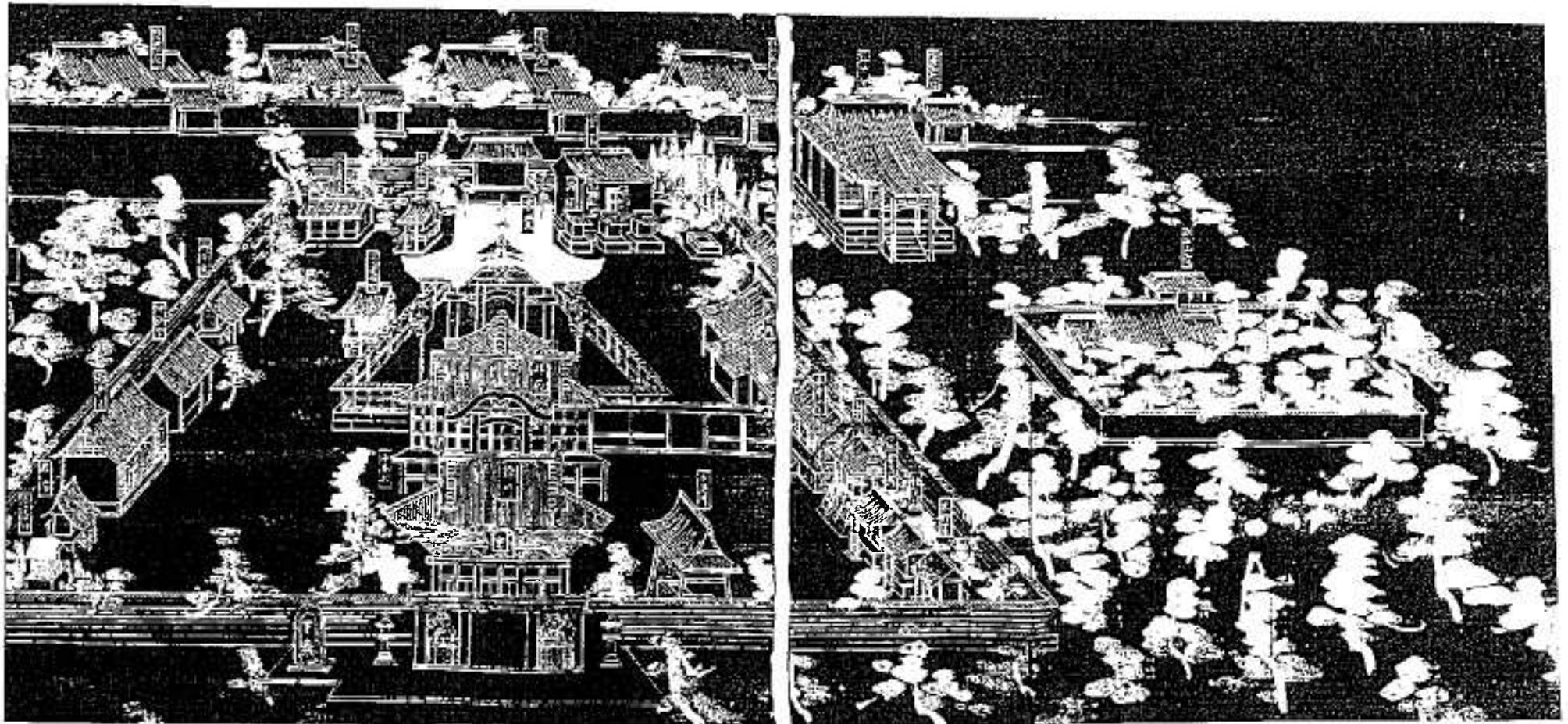


觀 海 潘 謂 著

廿七年十一月廿四日

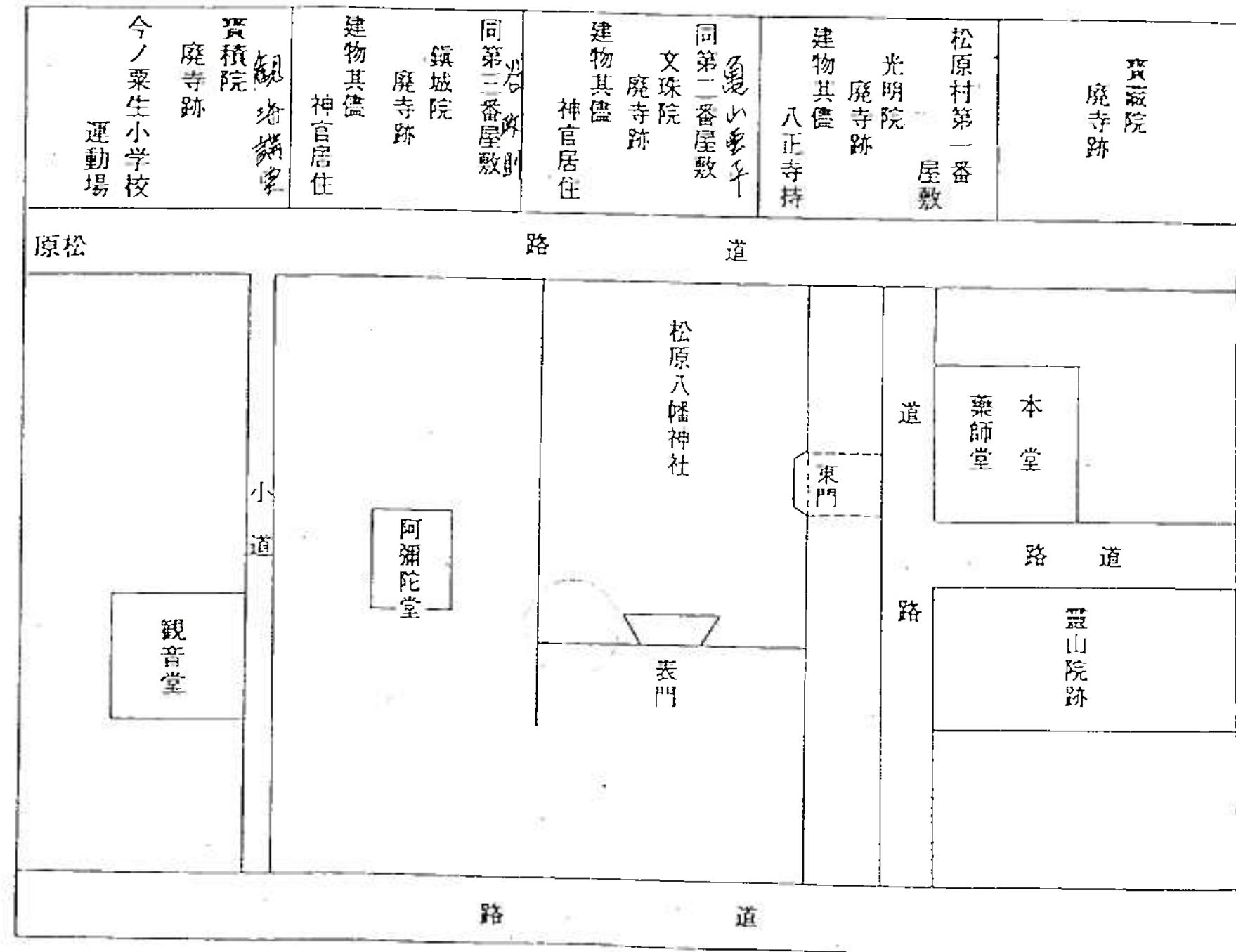


水池



松原八幡神社、藥師堂、靈山院、宝蔵院、光明院、文殊院、鎮城院、寶積院

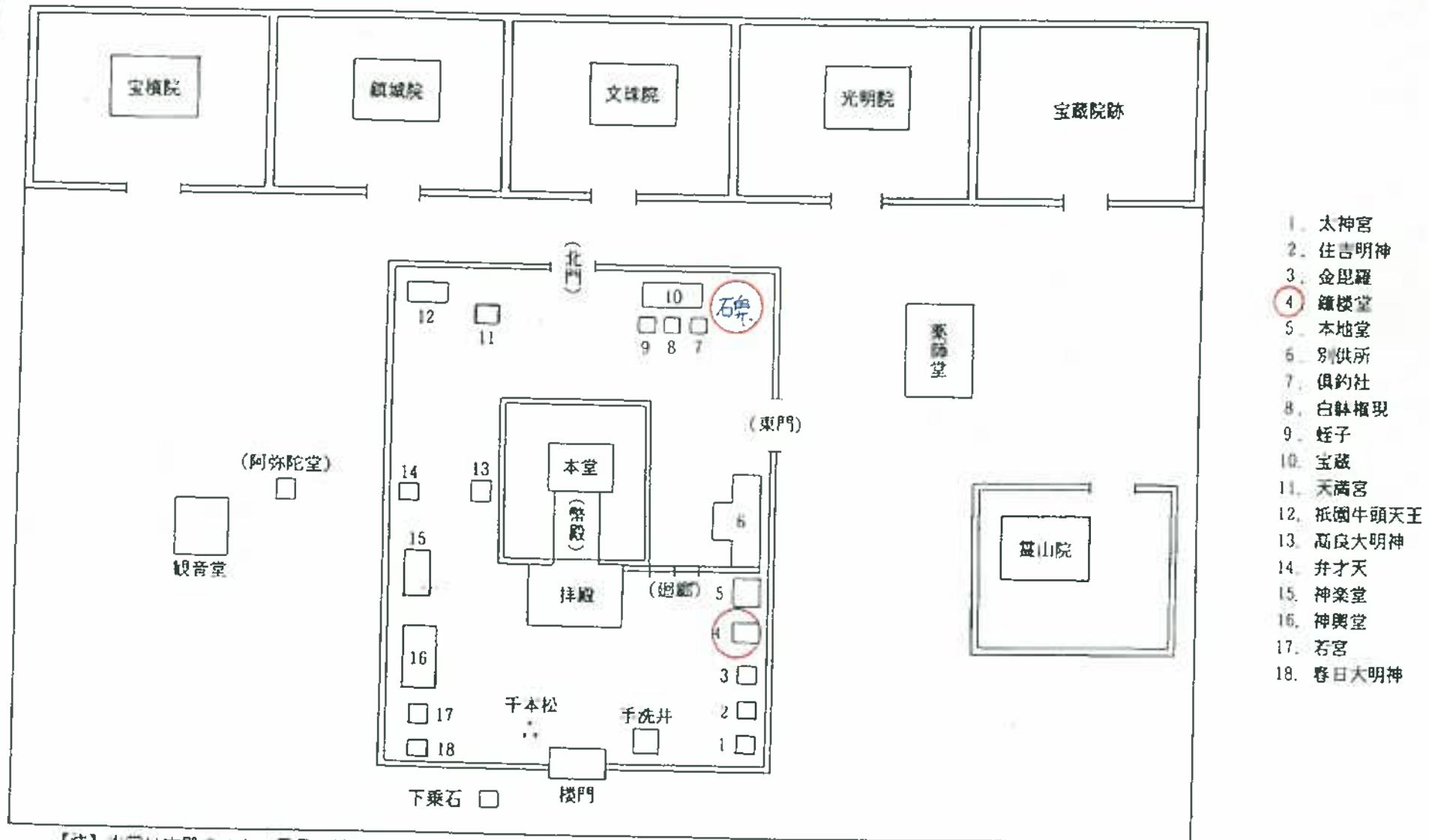
松原山八正寺附近（江戸時代）





北

松原八幡宮敷地内の建造物配置図（19世紀中頃）



【注】本堂は本殿のこと。番号を付した建造物の名称は右の欄外に記した通りです。

